

14歳 進学を断念後、塾に入門
16歳 兄や姉に代わり戸主になる
19歳 小説を書き始める
24歳 結核により他界

vol. 11

樋口 一葉

▶▶ Higuchi Ichiyo

16歳で戸主となり 母と妹を養うため小説家に。 わずか24年で散った才能

小説『たけくらべ』で知られる樋口一葉は、2004年から五千円札の顔を務めてきた。戦後、紙幣の肖像として採用された女性では紫式部に次ぐ2人目であり、紙幣に描かれた歴代偉人の中で圧倒的に短い生涯を終えた人物でもある。

▶▶▶ 読書好きで学業優秀だった子ども時代

樋口一葉（本名・樋口奈津）は、1872年（明治5年）、現在の東京都千代田区にあたる町で、比較的裕福な家庭の次女として生まれた。幼少の頃から蔵の中で本を読みふけるほどの読書好きで、学業も11歳で小学校を首席で卒業するほど優秀だった。卒業後、一葉は進学を希望するも、その道は断たれてしまう。母が断固反対したのだ。士族出身だった母は「家庭を守るこそ女性の役目。学問より家事ができることが大事」という考えで、「女性に進学は不要」という方針を決して曲げなかった。

そのことを不憫に思った父は、和歌を学ぶことを一葉に勧める。母の方針に従って家事を手伝い、裁縫の習得をする一方、一葉は父の知り合いから和歌を学び始め、14歳になると和歌と書を学べる塾に入った。

その翌年、官吏をしていた父が、退職して荷車請負業の起業に向けて動き出す。同じ年、戸主を継ぐはずだった長兄が結核で亡くなった。次兄は職人に弟子入りして家を出ているし、長姉も嫁いでいる。当時の民法で定める家の戸主を、父は16歳だった一葉に任せることにした。それは家族を守っていかなければならない責務を負うこと



1872年、東京生まれの小説家。下町で商売をしていた頃の経験をもとに描いた『たけくらべ』の他、『にぎりえ』や『十三夜』など庶民の心情に寄り添った作品を残している。

を意味する。とは言っても、父がいれば大丈夫なはず。だが、父は事業で失敗し、多額の借金を背負う。心労が重なったのか病に倒れ、あっけなくこの世を去った。

▶▶▶ 小説家として生きると決めた矢先に

17歳にして思いがけず一家の大黒柱となった一葉は、母と妹を食べさせていくため収入を得なければならない。裁縫や洗濯の仕事だけではわずかな賃金しか得られない。そこで視線を向けたのが小説家だった。同じ塾で学んでいた先輩が小説家としてデビューし、高い原稿料を得ていると知ったのである。さっそく妹を通じて紹介された新聞記者に小説執筆の手ほどきを受けると、「樋口一葉」のペンネームで書き始めた。処女作は創刊されたばかりの同人誌に掲載されたものの、わずか3号で廃刊になる。その後、文芸誌に作品が掲載された頃から一葉の名は知られるようになり、文学仲間たちとの交流も広がっていった。

生活費を得るため書き始めた小説だったが、次第にお金のために書くことに疑念をもつようになる。商売で生計を立てながら執筆活動を続けようと、下町に駄菓子屋を開くも、商売はうまくいかない。そこから「やはり自分には執筆しかない」と決意を固め、以来、執筆活動に打ち込んだ。次々と発表した作品は高く評価され、注目を集める。いよいよこれからという矢先、結核を患い他界。享年24歳。「もっと生きていれば、どれほどの成功を収めただろうか」。そんな想像をせずにはいられない短い人生だった。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）